
ゴーレムマイスター

駸目春水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーレムマイスター

【Nコード】

N6941Y

【作者名】

駁目春水

【あらすじ】

駄目な兄と優秀な弟が土機兵^{ゴーレム}に出会った事がきっかけで異世界へと飛ばされる。その世界は自分達がいた世界とよく似た多元世界だった。しかし、魔科学^{まかがく}が発達したその世界には魔法練成なる技術が存在した。兄弟は元の世界に帰る事ができるのだろうか？そして何故召喚されたのだろうか？コミカルな風味を醸し出しつつもシリ^{けねばいいな}アスに描く多元世界転生の魔法ファンタジーです。

プロローグ（前書き）

この物語は日本の現在を舞台としておりますが、すべてフィクションであり、人物及び団体、地名などには一切関係はありません。

プロローグ

「兄さん、右腕の動きが変だ。魔力はしっかり供給されてる？」

「——んな事言ったって、うわつ。」

土と金属を混ぜた様な不思議な材質で作られた操縦席。中央には水晶玉みたいな大きな紫色の玉。

尻が座面から飛び上がるほどの縦揺れの中、俺はその玉にしがみ付き、訳も分らず強く念じる様に力を込める。

紫の光がその光を増していき、その丁度真上に表示されるモニターに映される人型の映像に光が染み渡っていき、暗かった右腕部分も光を帯びた。

「——な、何とかいけそうだ、おらぁ！ 跳べえ！」

内臓が浮き上がるみたいな感覚に少々の吐き気を催す。

操縦席左右壁面と正面にあるモニターの奥壁面から見える外の風景が上下したかと思えば、広大な景色が眼下に広がる。

内臓が暴れまわったせいなのか、興奮しているせいなのかかわからないが、胸が煩い位に高鳴っている。

「兄さん、前！ 前、前！」

激しい衝撃と共に、更に激しく揺さぶられた内臓と脳。目の前の広大な景色は一瞬にして星空に変わる。

奇妙な操縦席から引きずり出され、今だ焦点の定まらぬ俺の視界にぼんやりと映るのは俺を心配そうに見つめる我が可愛い弟。

「兄さん、大丈夫？ 怪我はない？」

「お、おう。死んだ婆ちゃんにちよいとばかり会って来ただけだ。」

「お婆ちゃんは死んでないでしょ。——それより、すごいね、この……」

弟が俺と共に巨木へと激突したソレを見つめる。

操縦席と同じく、土で出来ているのか、金属で出来ているのか、不明瞭な巨体。^{いりよう}

かなりの高さから猛スピードで落下し、巨木に激突したにも拘らず、操縦者共々無傷なのは脅威的と言えた。

「——これが、俺の……土機兵。^{ゴレム}」

山道を走るバスの中。

二時間に一本という信じられない程に怠慢なバスを寸での所で乗り逃し、二時間待ってやって来たバスにやっと乗った俺と弟は祖母の家へと向かう道中だった。

事故で両親を亡くした俺達は唯一の身寄りである祖母に面倒を見てもらう事になっている。

祖母は偏屈な変わり者で人里離れた山の中に住んでいた。

祖母には一度として会った事はないが、高校二年の俺と、今年中学を卒業したばかりの弟では二人で生活するには思い切りが必要で、思い切りの足りない俺は祖母を頼る事に決めた。

俺と違い素直な弟は、俺の決断に異を唱える事なんて滅多にない。けれど、嫌な顔一つせず、俺に従う弟を見ていると少し胸が痛んだ。

俺と正反対で優秀な弟は有名私立に特待生枠で入る予定だった。

最初は俺も「お前は折角いい高校に受かったんだから、こっちに残った方がいい。向こうでバイトすればお前一人の生活費くらいはなんとか捻出してやるよ。」なんて兄貴らしい事も言ってみたものだが、流石に非の打ち所のない弟は「兄さんと一緒なら高校はどこだって構わないよ。僕がいたい場所はいいい高校なんて所じゃなくて、^{さすが}

兄さんと一緒にいられる所だから。」なんて、もしも妹であればうっかり一線を越えてしまいそんな殊勝な発言をした。そんな訳で俺は珍しく發揮した兄貴らしさをあっさりと引っ込めて弟を連れて行く事にした。

終電まで走破したオンボロバスを降りると、年に2、3人は遭難者が出ていそうな森の中。

携帯を開けば当然の様に圏外。

時折目の前を横切る虫は拳ほどではなかったにせよ、都会育ちの俺の目にはそのくらいの大きさに映った。

「一応、婆ちゃんの手紙には地図が載っていたんだが……」と言って、弟に差し出す。

その手紙を見て、弟の顔が青褪^{あせ}めていくのが分かる。

かなり大雑把^{おおざっぱ}に描かれた地図だとは思ったが、物事をあまり深く考えない俺は着けばその地図で分かるものなのだろうと安易に考えていた。

それがそもその間違いで目の前に広がるのは土と木だけで方角すら分からない。

地図に描いてあるのは俺たちのいるバス亭と大きな木、そして『この辺』と書いて矢印の引いてある民家と思わしき絵。

目に付く木はすべて樹齡何年か、というくらいの巨木ばかりでそれが祖母の言いたい大きな木なのかさっぱり分からない。

「と、兎に角歩こう。」

「——兎に角歩いちゃったら、絶対遭難しちゃうよ！」
最もな言い分だ。

「何だか喉が渴いたからアイスが食べたいよな。」

俺達はそのままバス亭のベンチに座り込んでいた。

弟は俺の言葉を無視したまま、何とか解読しようしているのか祖母の茶目っ気溢れる地図を睨み付けている。

「俺達、このまま死んじゃうのかな？」

「兄さん、ちよつと黙っててよ。それにここから動かなければ、最悪引き返す事もできるでしょ？」

「まあな……しかし、ここで一泊はしなけりやいかんけどな。」

「——へ？」

優秀な弟には珍しく素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げる。

地図の解説に夢中になっていたせいか、時刻表を見ていなかったのだろう。

俺はする事もなく、時刻表を眺めていたから知っている。

さつき俺達が降りたバスが本日最後の一本だった事を。

弟は一層必死になって地図に齧^{かぶ}り付いた。

陽が落ち、辺りを黄昏が包み始める。

明らかに焦り始める弟を横目で見る俺。

こんな時、駄目な兄貴でよかったと思う。

窮地に直面した時、弟が不安そうにすると皮肉な事に俺の頭は段々と冷静になり、心は穏やかになっていく。

「さあて、頭を使うのはやめて、今度は身体を使うか。」

俺はそう言つて弟の肩に手を引いた。

鞆からスナック菓子を取り出して、それを道々落とし、目印にして迷わない様に歩いた。

「兄さん、これ動物とかが食べちゃったら目印なくなっちゃうんじゃない？」

「大丈夫だ、こんな事もあるかと、『すっぱーヨ梅じそ味』を持ってきた。動物は『すっぱーヨ』は食わねえだろ？」

「そうだね。それなら安心だ。」

弟がバスを降りて以来初めて笑顔を零した。

俺はそれに笑い返して、先に進む足を速めた。

本当に動物が『すっぱーヨ梅じそ味』を食べない保証は勿論^{もちろん}ないが、それでも言わないと弟が不安に思う。

と言うよりも、そんな事は弟も重々《じゅうじゅう》承知だが俺がそんな馬鹿な冗談を言う事で弟は落ち着きを取り戻してくれる。出来た弟の事だ、馬鹿な兄貴を護らなければと思うのだろう。本当に駄目な兄は責任を持って必要以上に駄目な振りをしなければならぬ。

少なくとも俺と弟はそうやってバランスを取っている。

すっかり陽は落ちて暗くなった森。
唯一の救いは、晴れた空に浮かぶ満月が辛^{から}うじて視界を残してくれている事。

それとスナック菓子の『わさびポーク』を持ってきていた事。
無くなった『すっぱイーヨ』の代わりに『わさびポーク』を落としながら、暗い森を歩く。

何処からともなく、梟の鳴き声が聞こえる。

ほんの何日か前に魔法使いの映画を見ていて、主人公の相棒である白い梟がこんな風に鳴いていたから間違いない。

2、3kmほど歩いただろうか、人里は見えず、辺りの木々が更に鬱蒼^{うつそう}と生茂^{おいしげ}り、目にした事のない草花が目立つ様になってきた。

「クソ婆あ、あの絵心溢れる地図は方角だけは合ってたんだろうな。信じてるんだからな。」

疲れの所為もあり、苛立つてきた俺は悪態を付き始める。

道はどんどん細くなっていくし、心なしか山道をずっと登り続けている気がする。

「今、何か光らなかった？」

「——あん？ 俺には見えなかったぞ。」

「確かに光ったよ、向こうの方で……」

弟は木々の間を指差すが、暗がりでも数m先も満足に見えない状況では何があるのかわからない。

ハッとして、辺りの手ごろな木の枝を手に取り構えた。

『もしかしたら、獣か何かの目が光ったのかもしれない。』

声には出さなかったがそう思った。

弟も感じているのだろうか、俺の裾を強く握り締めている。

「だ、大丈夫だ。兄ちゃん、喧嘩だけは強い知ってるだろ？」

『しまった、声が震えた。』と後悔したが、弟は気付かなかったのか、それとも気付いていない振りをしてくれたのか分からないが「頼りにしてる。」と俺の顔を見返してほほ笑んだ。

本当に出来た弟である。

妹ならば獣に喰われて、この世を去る前に！と勢いに任せて押し倒している所だ。

けれど、獣ではなく、民家か何かがあるのかもしれない。

森の中では、その確率も低い、万が一にもと考えると容易には去れない。

俺達は光の見た方へとゆっくりと近づいて行っただ。

そこには崖なのか、植物の集合体なのかよくわからない、草木に覆われた丘が聳え立っている。

目を凝らしてよく見ると、草木の隙間から金属の様な物が見えた。

光の正体はその金属が月明かりを反射したからと思われた。

俺は絡まっている蔓を引き剥がし、その金属を掘り起こそうとした。かなり大きいソレは完全に草木に絡まれており、少し剥がしたくらいではその全容を現さない。

金属と土の様な素材で出来たそれに、何か文字が書かれている。

かなり古いものなのか、その文字は掠れていて、辛うじて一行読める程度だった。

「虚構よりも真の現実を……」

「兄さん、これは一体？」

言い知れぬ不安感が湧きあがる気がした。
弟もそうなのだろう、少し声が震えている。

けれどそれと同時に湧きあがる探究心が、纏わりついた蔓を更に剥がさせた。

ある程度剥がすと、それが人型をしている物だと分かった。

無我夢中^{むがむちゅう}で蔓を剥がし続け、その全容が明らかとなる。

「なんだ、こりゃ……。」

巨大な人型の建造物。

体長は三メートル程だろうか、少なくとも俺と弟の倍くらいの大きさはある。

頑丈そうな不思議な素材でできた身体。

まるでSF映画^{エスエフ}に出てくるロボットだ。

文字が書いてある部分の下には紫色の水晶玉の様な物が付いている。そこだけ明らかに違う素材で出来ていたので俺は何気なく、その玉に手を触れた。

すると触れた部分が強烈な光を放ち始め、周囲の大気を吸い込む様にそれを中心に風が吹き荒ぶ^{すさぶ}。

恐怖を感じ、手を放そうにも不思議とその手は離れない。

「ふ、ふざけんな、なんだよこれ。」

懸命に引っ張るが、玉に吸いつく様に俺の手は離れようとはしない。弟が後ろから腰に手を回して一緒に引っ張るが、二人がかりでも一向に離れる気配はない。

「何だか、やばそうだ。お前は早く離れろ！」

「兄さんを放つて離れられるわけないだろ！」

さらに強い光が瞬き^{またた}、視界を奪われる。

そして身体が宙に浮く様な感覚の直後、何かが炸裂した様な音と共に俺は身体を吹き飛ばされるような感覚に襲われた。

薄っすらと目を空けるとそこは木々の生茂る森の中。

何かが爆発した気がして、死んだと思ったが生きているし、身体もどこも痛まない。

周囲もなんら変わらず、陰気な森の中のまま。

ただし、かなりの時間気を失っていたのか、すっかり朝日が昇っている。

傍に倒れていた弟も目を覚ます。

「――に、兄さん？ 僕達一体？」

「どうやら、何ともないみた――」

それに気づいた俺は驚きに声が詰まらせた。

気を失う前にあったはずの、巨大な人型の建造物が跡形もなく消えている。

目を擦^{こす}って確認するが、やはりないものはない。

「どこに行っちゃったんだろう？」

「さあな。この風景からして、俺達がふっ飛ばされたわけでもなさそうだし、あの巨人が勝手に何処かへ行ったとは思えないな。」

「あれって、動くの？」

「さあな。俺が知るわけないだろう。それより、婆ちゃんがきつと心配してる、陽のある内になんとか辿り着こうぜ。」

歩き出して、すぐに一つの疑問が浮^ひかんだ。

ばら撒いてきたスナック菓子が一欠^{ひとか}けらもない。

まさか本当に動物が食べたのか？ と特にそれ以上は気に留めなかったが帰り道がわからなくなったのは少し不安だ。

一時間程、当てもなく歩き続けた所で「兄さん、あれって。」と弟が何やら上の方を指差している。

その方向へと視線を向けるとそこには周囲の木から頭一つも二つも

抜け出た巨大な木が聳え立っていた。

「クソ婆。本当にでけえじゃねえか。でもバス停からじゃさすがに見えねえよ……」

俺と弟は行く足を速めて、その巨大な木へと歩を進めた。

大きさの所為か近くに見えた木が意外に遠い。

しかし、人間って生き物はゴールが見えると頑張る事ができる現金な生物で、距離はあつたが、不思議と辛さは感じない。

巨大な木の下に着いた頃には一軒の小屋がすでに視界に入っていた。地図の絵とはかけ離れた雰囲気の小屋だったが、そこは敢て突っ込む事はせず、急ぎ駆け寄る。

平屋の古い家と言うか、小屋。

外には今時珍しく井戸があつたが、苔塗れな所を見るとさすがに使つては無いのだろう。

けれど、こんな森の奥まで水道つてのは通っているものなのか？

と疑問に思ったが気にしない事にする。

俺は古惚けたその小屋の扉を勢いよく開けて、声を張り上げた。

「遅くなつてすいません！ 孫の日向奔と翔です。婆ちゃんいますか？」

玄関向こうに広がる木製の床で出来た長い渡り廊下に向かって大声を出す。返事がない。

それから何度か「すいません。いらっしやいませんか？」と繰り返す。

やがて廊下の奥から「何度も言わなくなつて聞こえているよ！ 年寄り扱いするんじゃないよ、まったく。」と悪態を付く年配の女性の声が聞こえた。

「絶対聞こえてなかつただろうが……」

「何か文句でも言つたかい？」

小声で呟いた声を見事に聞き取り、反応が遅かつた割に地獄耳だった祖母の怒声が飛んできて、俺と翔は思わず口を手で塞いだ。

「まったく、誰だ——」

祖母らしき年配の女性が目の前で驚きの表情を湛えて立ち止った。手に持っている蜜柑みかんが床に落ちて、ぐちゃりとなる。

初めて会う孫に感動しているのか、まるで死人でも見るかのような驚き表情。

「お婆ちゃん、初めまして。俺が奔で、こつちが翔です。」

人見知りの激しい翔は声を発さず、軽く会釈した。

祖母はまだ驚いているかのような表情で右手を前に差しだし、ゆっくりと俺達に近づいて来た。

差し出しされた手の指先が何やら小刻みに震えている。

『予想以上に耄碌もろくしてんのかな？』と少し心配になる。

「そ、そんなに驚かなくても。確かに道に迷って一日遅れちゃったけど。」

「あんた達、死んだんじゃ……」

「は？ そんな大袈裟な、一日遅れたくらいで。」

「家族四人、事故で死んだって……」

「父と母は亡くなりましたが、俺達は生きていますよ。御厄介ごやっかいになると連絡を入れた筈はずなんですが？」

「あんた達、モンスターだね？ 私を騙そうたってそうはいかないよ！」

「いや、ちよつと、婆ちゃん——ぐっ！」

祖母が手に持っていた杖を俺に向かって翳かざした瞬間、柄の部分に付いていた見覚えのある様な紫の球が光を放ち、放たれた光が俺の身体を貫く様に奔はしったかと思うと同時に腹部に激痛を感じた。

「ちよつと、待ってくれよ。ってか一体今何したんだよ？」

「問答無用じゃ！ この変身モンスター！」

俺が両手を上げて降参のポーズを取った瞬間。

祖母は振り上げた杖をそのままに動きを止めた。

「お前、その腕の Magic reality deviceマジック リアリティ デバイスをどこで手に入れた？」

腕を見てみると見覚えのないブレスレットが嵌められている。

そのブレスレットにも祖母の杖と同じ様な紫の球が嵌められているのに気が付いた。

祖母はブレスレットをととても気にかけている様だが、俺にはいつ嵌められたのか、これが何なのかも皆目見当がつかない。

「は？ 何だつて？」

「その腕につけているMRDの事を聞いているんじや。」

「マジックなんかだか、エムなんかだか知らねえけど、俺にはわけがわからねえよ！」

「まあモンスターがMRDを付けているわけがない、話だけでも聞いてやるう。」

そう言つて、祖母は杖を下したが、警戒した様子はそのままに、俺と翔を中へと招いてくれた。

古惚けた外見通りの古惚けた廊下を後に付いて進むと、祖母の寝室らしき部屋へと招かれた。

寝室には大きなパソコンが置いてあつて、無数の配線が壁や床に張り巡らされていた。

その光景はまるで『電子の森』だった。

椅子に座るよう促された俺達は、軋みの激しい木製の椅子に腰かけ、バス停に着いてからここに来るまでの事や、自分達の事を思いつく限り祖母に話して聞かせた。

しばらく訝しげな表情で考え込んでいた祖母は、自分の頭の中身を整理するかの様に淡々と語り始めた。

「父親と母親を事故で亡くして、貴様らは祖母である儂を頼つてここまで来た。しかし、ここに向かう道中、不思議な人型の建造物を見つけ、それに触れて気を失つた——と。お前達の言っている事が本当なら、お前達はもう一つの世界から来たのかもしれない。」

「は？ それはどういう——」

「多元世界って事ですか？」

「は？ パラ……なんだよそれ？」

「考えられん事だが、どうもそうらしい。お前達がMRDの存在を知らない事も頷ける。」

「こつちの世界では、それは当り前の物なのでしょいか？ それは

お婆ちゃんが先程使った不思議な力と関係が？」

「おい、待て話を進めるな！ パラなんかの件くだりからもう一回——」

「お前達の世界には魔法も存在せんのか？」

今の質問の意味はわかる。

俺も翔もさすがに言葉を失った。
魔法なんてものはRPGや御伽話だけの存在で現実にあるわけがないと言つのが俺達がいた世界の常識。

しかし、どうもこつちでは違つらしかつた。

「魔法があるつてのかよ？」

「ああ、そこから説明が必要なのかい。少し長くなるぞ？」

祖母は億劫おっくうそうに眉間に皺しわを濃くして、俺と翔の顔を見渡してから確認する様に言つた。

「結論から言えば、こちらの世界には魔法が存在する。しかし、それもほんの20年ほど前に生まれたものだ。事の初めはVirtuバーチal reality gameリアルティゲームだつた。そつちの世界にもゲームはあつたじやろ？ 元は視覚や聴覚のみで楽しむ遊びだつたそれに他の感覚機能への刺激を追加したのじや。痛覚や、触覚、味覚や嗅覚。そこまで来るとその世界は一種の仮想現実となる。ここまではわかるな？」

辛うじて、納得はできないが理解はできる説明に曖昧あいまいに首を縦に振ると、祖母は湯飲みの茶を一口飲み、続けた。

「大勢の人間がそれに没頭したよ。その内に今度はアダルトな目的に使用され始め、仮想現実で男は絶世の美女を抱き、女は絶世の美男子に抱かれたわけだ。そこまで来るとVR《仮想現実》技術が進歩し、普及するのはあつという間じやつたさ。ひっひっひっ——」

と下卑た笑いを浮かべる祖母。

アダルトなの件^{くだり}辺りから慌てて翔の耳を抑える俺。

「兄さん。今、お婆ちゃんなんて？」

「世の中には知らない方がいい事もあるんだ。さあ婆ちゃん続けてくれ。」

「人間は完全にVRにのめり込んだ。すべての欲望を満たしてくれるわけじゃから当たり前じゃな。しかし、人間とは愚かな生き物で遂にはそれだけでは飽き足らず、VRの外、つまり現実の世界に妄想を持ち出そうとしたんじゃ。それが魔法の始まりじゃ。儂の杖や、奔のブレスレットの様なMRDが開^{かい}発された。MRDを介せば、妄想を現実に変えられる様になったわけじゃ。」

「——そりゃあ一体どういう仕組みなんだよ？」と俺は腕のブレスレットを睨み付けた。

嵌めこまれた紫の玉が鈍く光った気がした。

「研究の結果、MRDを介して妄想を現実に変えられる量には個人差がある事が分かった。その力を魔力と呼んだ。魔力の多い者ほど大きな妄想を現実へと変える事ができるし、魔力の小さい者は小さな妄想しか現実にはできん。まあそんな魔法についての研究を魔科学と呼び、日夜研究され始めたのが最近の事じゃ。MRDを悪用してモンスターを生み出す輩が現れたしたのも最近の事じゃが……」

「モ、モンスターがいるのかよ？」

「召喚魔法と呼ばれる技術じゃな。かなりの魔力がないと出来ない事じゃが、MRDを持つてすれば可能じゃ。勿論、魔^{まじろん}科学に関しては魔力の大小や召喚魔法以外にも色々あるが、それは追々《おいおい》でいいじやろう。大体この世界の事はわかったか？」

正直いまだに理解はできても、納得はできない。

信じる事ができないと言った方が正しいか、祖母の話は俺達の世界

では漫画や小説なんかで描かれる空想の話と何ら変わらない。

けれど祖母が不思議な力を使うのを目の当たりにした俺達は信じる
しかなかった。

そんな世界に飛ばされたのなら、俺達が時空を飛び越えたのも強^{あなが}ち
あり得ない話でもない。

「それじゃあ僕達はそのMRDの力でこの世界に呼ばれたって事にな
るのかな？」

一瞬、困惑した表情を浮かべた祖母だったが、自信なさげにゆっく
りと答えた。

「正直、それは考えられん。時空転移や時間転移は理論上は可能だ
が、あまりにも膨大な魔力が必要で、そんな魔力を持った者は絶対
に存在するわけがない。もしそんな化け物じみた魔力を持つ者がい
たとしても、現存するMRDでは、そこまで強大な魔力に耐える事
は絶対にできん。」

この世界の事は大体把握した。

俺達の世界とは別の選択をしたもう一つの世界。

並行世界、多元世界とかつて呼ばれるものらしいけれど、正直そん
な事はどうでもいい。

何故俺達がこの世界に来る事になったのか？　そしてどうすれば、
元の世界に戻る事ができるか？　そっちが知りたい。

けれど、俺達にとって最重要のその問題に関しては、解決の糸口す
らも掴めず、祖母には皆目見^{かひもくけんとう}当がつかない様子だった。

もちろん、俺達にも分かるはずもない。

そして、あの大きな人型の建造物は一体何だったのか？

大きな疑問を無数に残したまま、俺達兄弟はこつちの世界で暮らす
事を余儀なくされた。

「翔、お前は何を読んだ？」

俺と翔は空を走るバスに乗せられていた。

内装や外観は俺達の世界のバスとなんら変わらないが、こっちのバスは空を飛ぶ。

俺と翔は祖母に「しばらくこの世界で生活するのなら——」と半ば強引にこの奇妙なバスに乗せられ学校へと向かっている。

向こうの世界でも通う筈だった学校『県立謳花学院』。

けれどその名称はこっちの世界では若干異なっていて、『魔立謳術学院』。

最早、聖なる学び舎とは思えないアニメチックな名前がついているのである。

「そもそも『魔立』ってなんだよ？」という葛藤と戦いながらもバスに揺られているというわけだった。

「……こっちの世界の僕は凄く優秀な魔錬師だったみたいだから、予習を、ね。」

魔錬師とは『仮想を現実有成者』の総称らしい。

こちらの世界でも我が可愛い弟は優秀だったと祖母に聞かされた。

さらにはこちらの世界でも俺は駄目な兄貴だったと出来れば知りたくはなかった情報も聞かされた。

直向きに教科書を読み続ける翔の顔を一瞥した後、外に視線を投げた。

空飛ぶバスはいつの間にか森林地帯を抜けて、街へと出ていた。

目の前に広がる街は、俺の知る街と大きな違いはなかった。

空飛ぶ車やバスやトラックが目の前を走り過ぎていく事。

そして、高層ビルのが俺の知る街よりも200%程アップしている気がする事を除いては。

学校前のバス亭で降りると更に予想外な展開が俺達兄弟を待っていた。

教科書を手放そうとしない翔の手を引いてバスを降りると大勢の女学生が翔へと群がってきたのだ。

俺は鼻息の荒い女学生たちの勢いに気押され、あっさりと翔を差し出し、自分はそそくさとバス停のベンチへと非難した。

教科書に夢中になっていた翔は気が付いた時には女学生の群れに飲み込まれたのだろう。

揉みくちやにされながら、甲高い悲鳴を上げた。

俺が避難先のベンチで足元にある雑誌に気がついて拾い上げると、そこにはでかでかと翔の写真が載っていて隅には小さく俺の写真も載っていた。

『奇跡の生還！ 天才魔錬師、日向翔とその兄』

「その兄って……、俺も奇跡の生還者って事になってんだから友人A的な扱いしてんじゃねーよ。」

その見だしの後には翔が如何に^{いか}凄^いい奴かって事が書き連ねられていた。

どうやらこちらの翔は俺達がいた世界の翔より圧倒的な有名人だったらしい。

『最年少、最上級魔錬師』『新術式開発』『天元十師任命』。

記事に書いてある翔の経歴にはよく分からない単語ばかりだが、凄^いい奴だったって事は不思議と伝わってくる。

「こっちの俺は俺よりも劣等感があつたかもしれないな。」とこちらの俺の心中を想像し、思わず自嘲を浮かべた。

「に、兄さん、助け——て——」

バス停のベンチに腰を降ろし、呑気に拾った雑誌を読んでいた俺がやれやれと首を振りながら女学生に囲まれた翔を救出に向かおうとした時だった。

眩い閃光が視界の左端で弾け、足元の石床が砕けて飛散した。

そして直後に地面を揺るがすほどの轟音が鳴り響く。

俺は砕けた石床の飛礫が脛に直撃し、痛みあまり涙ぐんでその場にしゃがみ込んだ。

一体何が起こったのかと辺りを見渡すと、翔に群がった女生徒達が後退りしながら口ぐちに呟いた。

「……この魔法、下級師クラスの千早世良羅じゃない？」

「雷神、世良羅……。」

不安げに呟く女生徒達の表情が恐怖の色を深める。

そして視線が一点に集中し、俺はその視線の先を追った。

周囲の視線を一身に受け、淡々と歩を進めるのは同じ学生服をきた少女。

毛先にカールのかかった腰くらいはある長い金髪、大きくて少しつり上がった気の強そうな金色の瞳。

身長は翔くらいだろうか、俺よりは少し小柄な目も眩む様な美女が立っている。

「神々の畏れたる雷鳴よ——」

「やばくない？ また詠唱してるんじゃない？」

「我が猛る怒りをその神槍に宿し——」

小さな声で何かを呟きながら歩を進める世良羅と呼ばれた美女。恐れ慄く女学生達。

やがて、世良羅を薄らと光が包み周囲には電流の様なものが見え始め、所々で火花が散り始めた。

目の前を通り過ぎながら火花を散らす奇妙な世良羅のあまりの美しさに迂闊にも瞳を奪われた。

「——兄さん！ その娘、序歌^{じょか}を詠^よんでる！ 本気だよ！ 早く止めて！」

見惚^{みど}れて呆けていた意識が翔に引き戻され、言葉に従い世良羅の括^{くび}れた細い腰を一心不乱に抱き止めた。

振り向いた、世良羅の顔に驚きが宿る。

ふつくらと柔らかそうな唇から紡ぎだされた言葉は「馬鹿？」。

その直後、目の前に走る閃光。

激しく身を撃つ激痛。

薄れゆく意識の中に仄^{ほの}かに鼻を擦^{くすく}る世良羅の香り。

激痛と世良羅の柔かさから出^いでる恍惚^{うつつ}により俺の意識はやがて途絶えてしまった。

消毒液の香りと肌を擦れる覚えのある独特な感覚。

目を開けると、見覚えはない場所だったが何故か懐かしい風景。

「——保健室か？」

誰に呟いたでもなく言葉を発した喉は驚くほどに掠れていた。

「確か俺、あの金髪巨乳に——」

目を擦りながら呟いた俺の右頬に痺^{しび}れる様な痛みが走る。

静かな部屋に響き渡る乾いた炸裂音。

半開きだった目が一発で見開き、目に入^{さきほど}ったのは先程の金髪美女、

世良羅。

「えっと、あなた様は……どなた様？」

「やっぱり触っていたのか！」

釣り上がり気味の目尻がさらに釣り上がり、金色の瞳はきらきらと潤^{うるおい}っている。

再び響く炸裂音。

右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せと言うが、差し出す前に左頬はぶたれてしまった。

「何すんだ！ 痛いだろうが！」

「私の胸を触っただろう！ 触られた感触はあったんだ！ 私の事を巨乳などと辱めたのが何よりの証拠だ！ この変態め！」

「触ってねえよ！ あんたの胸がでかいのくらい見ればわかるだろうが！」

「やはり見てはいたのだな！ 見ていたら触りたくなっただな！

確かに聞いたぞ！ 恥を知れ！」

怒声を捲し立て目に涙を溜める世良羅を見ると、何だか自分が悪者の様な気がしてきた。

俺はそんな無意味に湧き出た謎の自責の念を振り払う様に首を左右に振ってから仕切り直す事にした。

「まあとにかくあんたも俺に電撃くらわした上におまけの往復ビンタもかましたんだから、あいこでいいだろう。」

そんな言葉では勿論納得しないであろう世良羅は俺を睨みつけ肩を震わせていたが、カ一杯鼻を噉って、目に溜まった涙を制服の袖で拭った。

「電撃をくらわず、と言うがあれば君が悪いのだろう。序歌を詠唱している帯魔状態の私に抱き――掴みかかったのだから。それに直前に私の電撃を見ているのだから、私が魔力放出系の魔錬師だと分かっていたはず。そんな私の帯魔状態の胸――いや、腰に掴みかかれれば当然あなるだろう。」

この世界では当然の用語なのだろうか、時折不自然に顔を赤らめながら小難しそうな用語をつらつらと人差し指を立てながら語る世良羅。

「まあな。」と分かったふりをして相槌をうち、「でも止めなきや撃っていたんだろう？ 何であんな事をする？」と問うと世良羅の表情が強張るのが見えた。

折角目尻が下がり和らいだ表情になったのに、その問いに再び目尻

が釣り上がる世良羅。

「目障り^{めざわり}だった。それにあそこにいたのは天才魔錬師の日向翔だろ
う？　ならお前が止めなくても私の魔法くらいあいつが防いでいた
さ。」

顔を背けて、嘲笑を浮かべながら簡単に言つてのける世良羅を見て、
胸がざわつくのを感じた。

この世界はこんなにも簡単に人を傷つける事を冗談みたいにやって
しまふのか？

それが怖かった。

ゲーム感覚なのかもしれない。
バーチャルリアリティ

VRから派生した様な今のこの世界ではこれが当たり前なのだろう。
本来この世界の人間ではない俺には、そんな事は到底^{とうてい}納得が出来な
かった。

考えるよりも先に身体を動いていた。

言い終わつてその場を去ろうとする世良羅の腕を掴む。

驚いた表情で世良羅は腕を掴む俺を見返した。

傷つけるつもりなんてないのに、不思議と掴んだ手に力が入る。

そこから敵意を感じたのか身構える世良羅。

「魔法だか何だか知らないが、二度とあんな使い方をするなよ。」

俺の言葉に拍子抜けした表情になった世良羅は俺の腕を煩^{わづ}わしいと
いった態度で払った。

緊張が解けたのか竦^{すく}めていた細い肩が少し下がる。

「君に指図される謂^{いわ}れはない。」

大袈裟な程にツンとした態度を取つてその場を去る世良羅に俺は何
も言えなかった。

確かに謂^{いわ}れがない。

彼女達の常識と俺達の常識の隔^{へだ}たりを確かに感じた気がした。

「そんな事はないと思うよ。」

聞き覚えのある声。

世良羅が開けっ放しのままにしていた扉の外に翔がいた。

「今日一日、こちらの世界の人達を見ていたけど僕達とそう変わらないよ。彼女もきつと悪いと思ったから兄さんの傍に一日中付いていたんじゃないかな。」

「お前はエスパーか？ 兄の心を読むな。」

舌を出して、照れ笑いを浮かべる翔にベッドを下り、鼻の頭をこずいてやった。

そこで俺はやつと聞き捨てならない言葉に気が付き、不覚にも素つ頓狂な声^{とんきやう}を上げてしまった。

「——え？ 一日中？ 入学式は？」

ハンガーに掛けた制服の上着を羽織りながら外を見るとすでに茜色の空が広がっていた。

保健室の出入り口で状況がいまいち飲み込めず硬直する俺の肩に、そつと手を乗せた翔が首を左右に振って溜息^{ためいき}混じりに呟いた。

「全部、もう終わっちゃったよ。」

こうして、俺の記念すべき学園生活一日目は人知れず、いや、俺知れず終わりを告げた。

日が沈み、闇に包まれた山道の上空を来たバスの乗って帰る。

俺達の世界では二時間に一本のバスも、こつちの世界では大幅なシヨートカットのお陰か十五分に一本は来るから乗り逃す心配もいらない。

良い子の俺や翔はすでに眠っている時間まで走っているくらいに終電も遅い。

さらにはバスを降りれば、徒歩五分で祖母の家。

あの暗くて恐ろしい山道を震えながら歩いていたつい先日の事が嘘

の様に快適だった。

夜も更けて、家に帰り着いた俺と翔は祖母と暖炉を囲んでいた。この時代に、しかも俺達より更に科学が発達している世界で暖炉は時代錯誤もいいところだが、古臭い雰囲気は嫌いじゃない。ほんのりと明かりの灯った部屋で鍋をつつくのは、まだ少し混乱する心を落ち着かせてくれる。

「婆ちゃん、こっちの翔があんなに有名人だなんて聞いてないぞ。バレちまうんじゃないか？」

「翔は自分の力や知識をひけらかす様な子じゃなかったから大丈夫だろう。――求められた時に結果さえ出せばね。」

「無責任だな。俺なんて今日死にかけたってのに。」

「大丈夫。あんたはちよつと死にかけるくらいに間が抜けているほうがリアリティがあるってもんさ。」

横を見ると姿勢を正して食事を食べながらも教科書を読む翔がいた。懸命に勉強する弟とまだ教科書を開いた事すらない兄。

確かにこの構図がこっちの世界のリアルでもあったのだろう。

俺達が通う事になった謳術学院は俺達に馴染^{なじ}みのある学年制ではなく、階級制という制度があった。

下級師クラス、中級師クラス、上級師クラス、そして最上級師クラス。

年齢に関係なく、試験に受かったものが進級できる実力主義の学校。俺と翔は下級師クラスに入学する事になった。

こっちの世界の俺達も謳術学院の下級師クラスに入学する予定があったらしく、案外とすんなりいった。

最上級師だったこっちの世界の翔は兄の俺と同じクラスを望んで下級師クラスへと編入したらしい。

まるで祖母の家に行く事を決めた時の俺達みたいに、こっちの世界の俺達も駄目な兄に弟が付き添うという構図は皮肉な程にそのまま

だ
っ
た。

入学式の翌朝、昨日の事もあって少し早めに家を出た俺と翔は空飛ぶバスに乗って学園へと向かっていた。

翔の耳には祖母からもらったMRDが紫色の輝きを放っている。

MRDとは紫色の玉を差しており、それ以外の装飾はまちまちの様だ。

（翔のMRDの方が洒落てるじゃねー）

と腕のMRDに視線を落とした。

祖母もこのMRDのモデルは見た事がないと言う。

この異世界に飛ばされた事に何か関係があるのだろうか？
そんな事を考えている間に学院の前へとバスが到着した。

昨日の騒ぎで懲りたのか、それとも時間をずらした事が功を奏したのか翔の追っかけらしき女学生達が今日はいなくて、ホッとした。
がその安心も束の間で更に会いたく人間が不機嫌面をぶら下げてこちらに向かってくる。

相変わらずの美しい容姿。

周りが霞むほどに目立つ、カールの掛かった金色の髪に勝気な金色の大きくてやや吊り上った瞳。

さらにはワイシャツのボタンが弾けんばかりの大きな胸に、それに反比例するかのよう^{くび}に括れた腰。

昨日の事がなければ、危うく一目惚れしてしまうところだ。

思い返して無視するべきかと迷ったが（同じ下級師クラスだから気まずくなりたくはねえな。）

そう考えた俺は引きつる頬の表情筋を総動員して吊り上げ、勤めて明るく手を上げて「世良羅さん！ おはよう！」と挨拶をしたが、世良羅はあっさりと俺の前を通り過ぎた、聞こえなかったわけじゃない。

すれ違いざまに「ふん。」と鼻を鳴らしていたから間違いない。

「あんた、そんなんじゃあ友達できねえぞ。」

「^{あくたい}つつい悪態をついてしまうのが俺の悪い癖だ。

俺の前を過ぎ、数歩先で足を止めた世良羅が小刻みに肩を上下している。

（あ、やべえ。）と思った時にはすでに遅く、不機嫌面に磨きのかかった世良羅が振り返り、つかつかとにじり寄って来た。

「世良羅と呼び捨てにされるのも気に入らないけれど、あんた呼ばわりはもつと気に入らない！ 初対面なんだから千早さんと呼びなさい！」

「いや、おい、初対面って——」

「うるさい！ うるさい！ うるさーい！ 君に出会った昨日を消したいわ！ 今日也會わない様に早く家を出たのになんでいるの？ 今日も消してしまいたくなってしまったわ！」

「そりやあないだろ——」

「とにかく、いいから、黙って聞きなさい。今後一切、私に話しかけない近寄らないを貫きなさい！」

肩を大きく上下させ、息を切らすほどに言葉を吐き出した世良羅が俺の返事を待つことなく勢いよく前に向き直り、再び歩き出した。心配そうに俺の裾を引っ張る翔に急かされるようにして、俺達も後を追って学園へと向かった。

昨日バタバタしていてよく見れなかったせいか、すごく新鮮に見える学園。

学園の門は童話に出てくる巨人でも潜れそうなくらいに大きく、白い支柱は毎日磨かれているのか顔が映りそうなくらいに綺麗で朝日を反射して輝いている程だ。

一歩門の中に入ると緑の多いキャンパスが出迎えてくれた。

装飾の施された豪華な花壇によく手入れされている植木が並んでいる道を通って学院内へ。

玄関は吹き抜けになっていて、朝日が溢れんばかりに差し込んでくる。

長い廊下は突き当りが見えないほどに続いている。

外から見ても敷地が大きい事は分かっていたが、中に入ってみるまでまさかこれほどとは思っていなかった。

「驚いたでしょう？ 僕も昨日は凄く驚いたよ。」
確かに驚いた。

俺達のいた世界の学校とは大きく異なるその光景はここが異世界なのだと再認識させてくれるには十分すぎた。

俺は翔に案内され、教室へと向かう。

向こうの世界と同じように『理科室』や『家庭科室』なるものがあったが、中には『方陣室』や『召喚室』となるべくお近づきになりたくない部屋もある。

『下級師クラスB組』と書かれた部屋の前で翔が「ここだよ。」と俺を中に入るように促した。つなが

どうやら下級クラスの中でも組分けがなされている様でA、B、C組の内、俺と翔はB組になったみたいだ。

大きく息を吸い込んで扉に手を開けた。

昨日は一度も教室に顔を出せず、クラスメイトとも面識はない。

気分はすでに転校生だ。

元々、異世界からの転校生みたいなものだが、翔に先を越されたのが孤独感を増大させる。

目を強く瞑り、木製の白い扉に手を掛けて勢いよく開く。

好奇の目で見られるのか、疎外的視線を向けられるのか、はたまた
……

「って誰もいねえじゃねえか！」

綺麗に整列された机と椅子には誰もおらず、電気もついていない教室に俺の渾身の突っ込みだけが響き渡った。

「ま、まだ早いからね。」

苦笑いを浮かべてそう言う翔を見返し、どうしようもなく恥ずかしくなった俺だったが兄の威厳を保つべく平静を装って席へと着く。

「兄さん……」

「なんだ、翔？ お前も早く席に着け。」

「そこ僕の席なんだけど……」

動揺のあまり席に書かれた苗字だけを見て、うつかり翔の席に着いてしまった俺は視線を翔には向けずにそっと尻を椅子から浮かせてすぐ後ろの自分の席へそそくさと移動した。

それからHRホームルームが始まるまで翔と目を合わせる事ができなかったのは言うまでもない。

クラスメイト達がばらばらと登校してきて、無人だった教室の席が次第に埋まり始め、心なしか電球の照度が上がり、気温も上がっていく様な気がした。

冷たく恐ろしいイメージのある無人の教室が、人が一杯に入った途端に活気が溢れ雰囲気が大きく変わるのだから不思議だ。

ひとなつ人懐っこい者はすでに友達が出来ているのだろうか、挨拶を交わす者や机を挟んで会話している者がいる。

俺は生来、せいらい人見知りはないが決して人懐っこいタイプではないので黙して机に座しながらも周囲のクラスメイトをチラ見する。

始業のチャイムが鳴り、席に着かずに楽しげに会話していた連中もそのチャイムに慌てて自分の席に着席する。

チャイムから教師が扉を開くまで、数分の静寂があり、その間何故だか無駄に緊張してしまった俺はお尻の辺りにじんわりと汗をかけた。

扉を開けて入って来た女教師と思しき人物は俺とそう歳が変わらないくらいに若かった。

眉辺りで綺麗に切り揃えられた黒の前髪。

肩の下で綺麗に切り揃えられた黒の後ろ髪。

スーツも黒。

中に着ているシャツも黒なら、瞳の色も黒、マニキュアまで黒で、恐らく下着も黒なのだろう。

グラマラスな体系を黒で無理矢理引き締めた女教師は油断からだろうか、はたまた過信なのだろうか、黒いシャツの胸元は第三ボタンまでおっぴろげで飛び出さんばかりの巨乳と言つ括りにはすでに収まり切らないであろう爆乳をひけらかしている。

本当にこれは教師なのだろうか、と疑いたくなるほどに目つきの悪い黒づくめの女教師が教壇に立ち、ファイルを叩きつけた。

「ゴミ虫共。出欠を取るからハキハキ返事をしさせ。」

（いや、教師じゃねーだろ。こいつ。）

「えー、クソ安藤。」

「は、はい。」

「あー、ゴミ浦田。」

「ゴ……、はい。」

「クソ」だの「ゴミ」だのを生徒の名前に付け加えつつ女教師の点呼は続く。

「クソビッチ千早……、千早世良羅は今日もいねえのか？」

世良羅が同じクラスだった事に俺は初めて気が付いた。

辺りを見渡すと空席が一つ。

あそこが世良羅の席なのだろう。

朝、校門の前で会ったから登校はして来ているはずなのだが、なんて考えたが報告する義務はないのでそのままスルーする事にした。何せ俺は冷徹な男ではないにしろ、お節介^{せつかい}を焼くタイプでもない。そして更に点呼は続き――

「えっと、昨日女にのされた哀れで惨めなゴミでクズな日向兄。」

こめかみの辺りが脈打ったのを感じたが、世渡り上手を駆使しつつ足りない能力を補う人生を送ってきた俺は心を落ち着かせて笑みを湛^{たた}えて返事をした。

出欠の点呼を取り終わり、女教師は右手で頭を掻き、左手をシャツの下から中に突っ込み腹を掻きながら話し始めた。

乱暴に突っ込まれた左手とシャツの隙間から覗く、ヘソのチラリズムは男子生徒の思春期ゆえの妄想をかき立てるには十分過ぎるものだったので、心の中で（ご馳走様です。）と呟いた。

性格は明らかに悪い女教師だが、補ってあまりあるほどに容姿がよいのは認める。

先程の罵倒はすでに頭の片隅にすらなく、（楽しい学園生活になりそうだな。）などと頭に花を咲かせている。

「あたしが雑魚下級師クラスB組の担任をする事になった、最上級師クラスの御手洗静琉だ。とりあえずはあたしが卒業するまではこの担任をするからな。口を噤んで、ただただ付き従え、そして敬え！」

前の席に座っていた翔が振り返り俺に説明をしてくれた。

「どうやら、俺達の世界で言う教師とは異なり上級生が下級生の教師を務めるシステムらしい。」

だから当然教師になる者に人間性を求めているとはいけないということになるのだろう。

「——おい、日向兄。あたしが喋っているのだから地蔵の様に口を噤んで話を聞け！」

静琉は俺を一喝して教壇から降り、淡々と語り始めた。

踏み出す度に上下する静琉の胸部に男子の視線は集中したが、この世界に慣れない俺には静琉が語る話の方が興味を引いた。

「貴様らは最下級のクズだから基本から説明してやるが、そもそも魔法と言うのは名ばかりで正しくは我々魔錬師は想像を具現化する事により、特殊な力を発揮する。」

ここまで祖母の説明で理解もしているし、仕組みはわかっているがその事実に対しては納得している。

「この想像を具現化する行為を【錬成】と呼ぶが、錬成するには手順がある。まずは【思念化】。色や形などをできるだけ具体的に想

像する事だ。そして次に【流動化】。思念化により想像した対象及び部位に魔力を流し込む事だ。例えば炎を口から吐き出したいと思念化した力を錬成したいのなら、口腔内に魔力を流し込まなければならぬ。その行為を流動化と呼ぶ。そして、最後に【集束化】。先程の例えで言えば、口腔内に流し込んだ魔力を集束して、思念化情報を具現化する作業だ。思念化、流動化、集束化の三点が上手く行われる事で魔法の錬成は完了する。」

正直、そんなに簡単なのかと唖然^{あぜん}となった。

もっと代償的な物が必要だったり、煩わしい手順を踏まなければ魔法は使えない物だと思っていたからだ。

口を開けて呆けている俺を一瞥した静琉は眉間に皺を寄せて続けた。
「――最下級のゴミである貴様達でも分かっているとは思うが、思念化、流動化、集束化は簡単な事ではない。思念化する為には【フォーマット】をMRDにインストールしなければならないし、流動化で上手く魔力を供給しなければならない。それにはMRDの操作を熟知していなければならない。さらには集束化で供給した魔力を凝縮し具現化しなければならないが、それにはコツや才能が不可欠だ。」

教鞭を伸ばし、俺を指す様にして振り回す静琉。

明らかに俺に向けて言っているのだろうと推し量るのはその態度からも容易である。

静琉は教鞭を自分の肩に担ぐ様に置き、面倒臭^{めくび}そうに欠伸まじりでさらに続けた。

「まあ色々と制約はあるにしろ、簡単な魔法錬成は義務教育のガキにだって使える。この学園は貴様ら雑魚を人の役に立てるレベルの魔法錬成が行える様にする為の施設だ。――さあ貴様らの足りない脳味噌で理解できたなら体育館に移動するぞ。」

暴言を一通り吐き終わりすっきりしたのか、静琉はやっとの事で笑顔を浮かべた。

しかしその笑顔に仄かな恐怖抱く俺達生徒は言われるままに静琉の

後に従って体育館へと移動し始めた。

長い廊下を渡り、学園内の最深部にある体育館へ。

教室のある中心部から最深部の体育館までは歩いて15分近くもかかったからこの学園の不気味なまでの巨大さを身体で認識する事が出来た。

体育館は木目状の床に綺麗にワックスが掛けられていて、様々な色のテープで線が引いてある。

ここまでは俺達の世界とそう変わらないのだが、やはりこの学園の体育館だけあり、広さは馬鹿げていた。

バスケットボールのコートなら10個くらいは作れそうな、グラウンド並の広さを誇る体育館など見た事がない。

俺達の組が一番早かったようで、同じ様に担任に率いられ、不安そうな面持ちで他の組の連中も体育館へと入って来た。

組ごとに整列させられ、姿勢を正して待つと、眼鏡をかけた前髪の無駄に長い男が体育館奥のステージの上に立った。

その時、後方にある体育館の扉が大きな音を立てて開いた。

生徒達全員が突然の大きな音に驚き、一点に視線が集中する。

俺も同じように音のする方へ視線を向けると不貞腐れた顔をした世良羅が立っていた。

制服の上に羽織った白いカーディガンの裾^{すそ}を伸ばして掴む様にしながら歩を進める世良羅は注目されて恥ずかしいのだろうか、肩を竦めており耳は赤くなっている。

「み、み、見てんじやないわよ！」

恥ずかしさに堪^{たま}りかねたのか顔まで赤らめて怒声を発する世良羅。周囲の空気が帯電した様にパチパチで火花を散らせた。

「遅れてきておいて見るんじゃないだろうが、このクソビッチ。さっさと列に並べ。」

ただでさえ目立つ容姿をしているのに、あの性格では翔をぶち抜いて学年一の有名人になる日もそう遠くはないだろうと俺は嘲笑の笑

みを浮かべた。

さすがの世良羅も静琉に叱責されて、大人しく列へと並んだ。顔は相変わらざるの不機嫌面だったが、元々ああいう顔なのだろうと思えばいい加減気にならない。

「ごほごほつ……私、学年主任の駿河志智郎と申します。昨日からの入学式等色々お疲れさまでした。ごほつぐほつ……。」

世良羅に集まった視線を遮るかのよう^{やえき}に、咳き込みながらも丁寧な言葉で喋る志智郎は少なくとも静琉や世良羅よりも随分とまともに見えた。

ただし顔色はすこぶる悪い。

「失礼します。」とがらがら声を発し、後ろを向いてさらに激しく大きく咳き込む姿は、あんまりまともではなさそうだと一瞬で俺の考えを改めさせる。

「失礼しました。私、あまり身体が丈夫ではないもので……。話を続けます。貴方達はこれから最上級師を目指してこの学び舎で励むわけですが……ごほごほつ。」

「——とその前に一度死んで頂きましょうか。」

長い前髪の間隙から除く眼鏡の奥で妖しく輝く眼光。

志智郎の言葉の意味を飲み込む前に視界が一瞬で漆黒の闇に包まれた直後、足元が崩れ去るような感覚に襲われた。

内臓が持ち上げられる様なジェットコースターに乗ると起きる落下時特有の身体的異常を感じたが、地に足はついていし、着地したような衝撃も感じない。

恐る恐る目を開けると、つい先程までの体育館はすでになく、ごつごつとした岩肌の洞窟と思われる風景が眼前に広がっていた。

暗がりといえは暗がりだが、一寸先が見えないほどの闇ではないし、暗闇に少しずつ目がなれてきた事もあり周囲の状況が把握できるくらいにはなった。

肩がぶつかる位の距離にいた見知らぬ生徒も、目の前に立っていたはずの翔もない。

（また飛ばされちまったのか？ 翔はどこに？）

「空間形成とはやってくれるわ。」

聞き覚えのある女の声。

「——にしても、一体なんのつもりかしら。」

できれば今後関わりあいにはなりたくなかったが、さすがにこの状況では無視する事はできない。

「千早さん。これは一体？」

出っ張った岩に腰を降ろした世良羅は何が気に入らないのか、言葉を発した俺を容赦なく睨み付けた。

けれど魔法の事もこの世界の事も殆ど理解していない俺が今頼れるのは、このツンツン美少女だけだ。

勇気を振り絞り、無下にされる事は覚悟の上で再び声を振り絞る。

「千早さん。これは——」

「空間形成術よ。君はそんな事も知らないの？」
予想外だ。

もう2、3度無視される事を覚悟していた俺にはこの上なく嬉しい

誤算である。

「俺、あんまり魔法に詳しくなくて……」

訝^{いぶか}しげに、言葉を発することもなく俺を見返す世良羅の熱烈な視線に耐えかねて眼球が泳ぐ。

「——まあいいわ。最上級師が数人がかりならこの規模の空間形成術が練成出来ても不思議ではないしね。」

「いや、だから、空間形成術って？」

「空間形成術って言うのは、こんな風に何も無いところに空間を作り出す術式の事。具現化系練成の最上位術式よ。」

「そんな事までできるんだな。すげえもんだ。」

「君、そんなに呑気に構えてて良いの？ 閉じ込める事が目的とは考えにくいし、必ず何か仕掛けてくるわよ。」

「仕掛けるって何を？ 急にそんな事を言われても……。」

腰かけたながら不満気に頬杖^{ほおづえ}をつく世良羅は余裕がある様に思えたが、首を動かさずに周囲を見渡し何かを警戒している事に分かり、そうではないのだと気付いた。

世良羅の隣にある岩に腰掛た俺は暗がりの中での沈黙を恐れ、会話を続けようとする。

「でも、学生とはいえ教師なんだから危険な事はしないだろ？」

「君、魔立の学校を舐めてない？ 君は天才の弟君とは違うんでしょ？ それなのになんでそんなに余裕ぶっているわけ？」

「そんなつもりはねえよ。余裕なんて、あったことないさ……弟が優秀すぎるとな。」

「別に君が死のうが半身不随になっても私は構わないけど、警戒した方がいいのは間違いないわ。魔立の学校では授業中に怪我人が出るなんてざらだし、死人だつて——」

言いかけて世良羅は顔を顰^{しか}めて言葉を絶った。

俺は聞き逃さなかった。

今、確かに死人が出る事もあると言おうとした。

魔法が存在する位にファンタジーな世界なのだから多少危険な事も

あるのかもしれないとは思っていたが、学校の授業で死人が出るなんてのは俺の常識の外だ。

更に言えば、死人なんてサスペンスドラマでしか見た事のない現代っ子の俺からすれば、その告白は膝が笑うほどに驚き、恐れられる事だ。

言葉を発すれば、声が震えてしまいそうで、沈黙に耐えることを選んだ俺は口に手を当て、世良羅の様に頬杖をつく格好動揺を悟られまいと固まった。

しばしの沈黙の後、世良羅が急に俺に覆い被さるようになり、当てていた手ごと俺の口を塞いだ。

密着し、その場に倒れる様に岩肌に背中を打ち付けるが、世良羅の柔かな感触とシャンプーの臭いだろうか、柑橘系の甘い香りに全身件は研ぎ澄まされ痛みなど感じない。

股の間に柔かな太ももを射し込まれ、胸部に確かに感じる柔かな膨らみ。

（何だ？ 何故押し倒された？ 嫌われてはいないにしても、好かれてる雰囲気などまるでなかった。いやむしろ高確率で嫌われているだろう。なのに何故？ はっ！ まさかあれか？ 異世界に飛ばされた男は次から次に現れる大勢の女の子達に思いを寄せられハレム状態になると言うあれなのか？ 翔にはあり得ても自分にはあり得ないと思っていたが……、それでは遠慮なく。）

「——静かにしてよ。」

生まれて初めての状態にすっかりトリップしてしまった俺は思いの外、息遣いが荒くなってしまう様で、小声で叱責する世良羅のひんやりと冷たい掌に口を塞がれた。

その冷たさに冷静を取り戻せた俺は、自分と世良羅以外の者の気配を感じた。

獣臭い臭気が鼻を突き、荒い息遣いが耳に障る。

それは見るまでもなく、直感的に人とは異なる者を連想させた。

覆いかぶさる様な格好のまま俺の口を塞ぐ世良羅が耳元で囁き、吐息に首筋がくすぐられる。

「——やるしかないわ。援護しなさい。」

そう呟いた世良羅は急に俺の上から飛び上がり、首だけを少し浮かせていた俺はその反動で頭を地面に打ち付けた。

ぶつけた頭を擦りながら視線を上げると、見た事もない化け物が俺達の前に仁王立ちしている。

童話に出てくる狼男に似た姿。

しかし目の前のリアルなそれは今まで見たどんな物語の挿絵なんかよりも醜悪で恐ろしい姿をしていた。

「神々の畏れたる雷鳴よ、我が猛る怒りをその神槍に宿し——」
聞き覚えのある文言。

ほの暗い洞窟が蠟燭ろうそくの様に微弱な光を纏い始めた世良羅に照らせ明るくなる。

帯電している様な世良羅の身体からは稲妻はとばしが迸り始め、それを見ていた化け物は低く唸り声を上げて身構えた。

よく見れば、世良羅の指にはMRDが装着されており、指に光る紫紺の玉からは浮き出るようにしてキーボードに似た形状の物が具現化しており、世良羅はそのキーを懸命に叩いている。

「——【雷槍】よ我が敵を穿て！」

その言葉を発すると共に激しい閃光が世良羅の指先から迸り、化け物の胸部を貫いた。

人差し指を突き出した世良羅の指先からは一筋の煙が立ち昇っている。

化け物は短い悲鳴を上げてその場に突っ伏した。

「——やったのか？」

「次弾装填。術式名、雷槍再起動。思念化情報再構築——」

俺の問いに応える事もせず、再びMRDからキーボードを出し、忙せわ

しなくキーを叩き始める。

キーボードは半分透き通っていて、そこに存在しているのかもあやふやで3D映像のようだ。

MRDと同じく紫色の光をぼんやりと放っており、その光が世良羅の鼻筋の通った美しい顔を照らす。

「何をぼさつとしているの？ 次が来るわ！ 早く援護しなさいよ！」

世良羅の言葉通り、次は三匹も先程と同じ化け物が現れた。

けれど俺には魔法は使えない。

使い方がさっぱりわからない。

「ど、どうすりゃあいんだよ？」

もはや魔法について無知な事を隠しておける状況ではなかった。後先考える前にこの状況を乗り切らなければ、「後」そのものが存在しなくなってしまう。

「君、本気で言っているの？ MRDを持っているのに何の魔法練成もできないって事？」

「その通りだよ！ さつさと教えてくれ！」

化け物達はすぐに飛び掛ってくる様子はなく、俺達を囲む様にして移動する。

化け物の口から零れる涎よだれが危機感を掻き立てる。

「信じられない！ 信じられないわよ、君！ とにかくMRDを起動させなさい！」

「それすらわかんねえんだよ！」

「わけがわからないわ！ 記憶喪失なの？ それとも果てしない馬鹿なの？」

「んな事、今はどうでもいいだろう！ 早く起動のさせ方を——」
「触れて起動コードを唱えればいいだけよ！ ほら、早くしなさい！ まさかそれすらわからないとは言わないでしょうね？」

「わかんねえよ！ そんな——」

そこまで言葉を発したところで、頭に言葉が浮かび上がってきた。

空虚の脳裏に浮かんだ言葉。
化け物達が必殺のポジションを取り終えたのか、身を低くして臨戦
体勢を取る。

「起動コードが本当にわからな——」

「——虚構よりも真の現実を！」

頭に浮かんだ言葉を口すると腕のMRDが眩い光を放ち、キーボードが浮かび上がった。

「知っているんじゃない！　こんな時にふざけないで！　早く憑代よりしろをこちらに向けて！」

俺が腕を差し出す前に世良羅が乱暴に憑代と呼んだキーボード状のそれを引き寄せいじくり始める。

憑代の操作に集中し、自然と身体が近くなり何度か感じた柔らかさを肘の辺りに感じた。

が、そんな事を考えている時ではないので感触だけを記憶の奥に大事にしまい込んでおこうと世良羅に感付かれない様に小さく左右に首を振った。

オートマチック

「——思念化をオートに設定。ATモードで憑代を再起動。」

わけの分らない事を呟きながら憑代をいじくり回していた世良羅が離れると俺の憑代は光を失って消滅してしまった。

「おい！　消えちまったぞ！　どうすんだ！」

「うるさいわね！　今再起動中だから、立ち上がったら——」

さすがに待ち切れなかったのか、化け物が毛むくじやらの腕を振り上げて一斉に襲い掛かってきた。

「序歌を省略！　雷槍よ、我が敵を穿て！」

世良羅の指先から再び閃光が迸り、至近距離の化け物を撃ち抜いたけれど先程の化け物よりも頑丈なのか、苦しそくに唸り声を上げ膝をついたものの、すぐさまゆらりと立ち上がる。

世良羅は口角を少し上げて小さな舌打ちをした。

「おい！　あまり効いてないみたいだぞ！」

「しょうがないじゃない！　序歌を破棄したんだから！」

そう言われてみれば、先程の閃光よりもかなり光が弱かった気がする。

恐らく序歌とは呪文の事で、それを詠まないと魔法は本来の力を發揮する事ができないのだろう。

そうこうしている間にキューンとディスクの回るような音と共にMRDが光を放ち、キーボードだけだった憑代と呼ばれるそれにモニターが追加された形になって再び現れた。

「何でもいいから、術式を立ち上げて！　思念化はオート化してあるからイメージする必要はないわ！　ATモードだから流動化と集中化もオートでやってくれる！　序歌は憑代のモニターに表示されるものをそのまま詠み上げて！」

指先から、か細い電流を発し、化け物に抵抗しながら早口で捲くし立てられ、言われるがままにモニターに表示されている【術式フォルダ】なるものを開いて、一番上のファイルを選択した。

「えーつと……」

「大地を切り裂き、海を割るその隻腕を振り上げ……【憤怒の右腕よ！　わ、我が敵を打ち砕け！」

脳が泡立ち、血液が沸騰し逆流する様な感覚。

身体が熱を持ったように熱くなり、その熱が右腕へと集中していく。嗚咽おえつが鳴りそうな程に気分が悪い。

気分の悪さが増していく事に同調するように右腕が光り輝き、徐々に巨大化していく。

「お、おい！　これ本当に大丈夫なのか？　すごく気分が悪いぞ。」

「大丈夫、体調が優れないのはATモードの憑代によって君の魔力が無理矢理に操作されている反動だから心配ないわ！」

「——そういう、事は、先に説明し、ぐう！」

右腕に締め付けられるような激痛が奔はしる。

いつそ右腕を切り落としてしまいたいほどの痛みに唸りながら、朝の教室で静琉が教鞭を振りながら語っていた言葉を思い出した。
（魔法は決して簡単じゃないってわけね。楽しようとするところいう風になるわけだ。）

思念化、流動化、集中化。

そのすべてをオートでやろうとすると強引に脳内にイメージを作られる反動で脳が激しく揺れ、泡立つ様な感覚に襲われる。

流動化で全身の血液が逆流するような感覚に陥るのは血液が移動しているのではなく、魔力を意思とは関係なく操作されている証拠だろう。

そして、腕がこんなにも痛いのは恐らく集中化の影響なのだろう。

魔力を帯び右腕の光はその照度を強め、帯魔化された状態の腕は徐々にそのサイズは大きくなり、形状までもを変えていき、痛みが徐々に増していく。

まるで腕が引き伸ばされるような感覚とそれに伴う激痛に瞳が湿る。光が弾ける様に進み、あまりの眩さに目が眩んだ。

「……なに、それ？」

世良羅の動揺を含んだ声が耳に届き、視力を取り戻し始めた眼で痛みが治まった腕に視線を落とす。

俺の右腕は先程までとは大きく異なる姿へと変貌していた。

地面に付くほどに巨大化し人間の皮膚ではなく、金属の様な土の様な不思議な素材で構築された腕。

驚きというよりも恐怖に近い感情に頭が真っ白になる。

唯一脳裏に浮かぶのは、この世界に飛ばされる直前に翔と見た巨大な人型の建造物。

あの建造物を構築していた素材にそっくりな自分の腕がさらに気味が悪く、恐怖心を駆り立てる。

「なんだっつーんだよ……。」

驚きに立ち竦んでいると世良羅の悲鳴が聞こえ、腕に落としていた視線を慌てて前へと向けた。

二匹の化け物に世良羅は両腕を拘束される様な形になっていて、少し離れた場所にいた残りの一匹の化け物がそこに歩み寄る。

普段は勝気な表情を崩さない世良羅の顔が恐怖に歪んでいる。

離れていた場所にいる化け物が世良羅に危害を加えようと近づいているのは一目瞭然の光景だ。

涙を溜めた視線をゆっくりと俺の方に向ける世良羅が助けを求めているのは鈍感な俺でも瞬間的に悟る事ができた。

正義感とは違うし、恋愛感情なんてものでも当然ないが、絶対に助けなければならなかった。

「化け物が！ 千早さんを離しやがれ！」

この右腕が魔法である事は間違いないく、どんな効力があるのか、どの様に使えばいいのかはわからなかったが、俺はただ我武者羅に^{がむしゃら}変形した腕を化け物へと振りかざそうとした。

が腕が動かない。

肘から下が巨大化し、変形した腕は恐ろしく重く、肩が外れそうになる。

まるで米俵を腕にぶら下げているような感覚。

無理矢理動かそうと駆け出した俺は右腕に引つ張られる様にして尻餅をつく。

^{せうかく}

折角苦しい想いをして魔法を発動してもこれでは余計な足枷^{あしかせ}が増えただけで、生身の方がまだマシだった。

化け物の魔手が世良羅に迫る。

「なんだよ、これ？ 動け！ 動きやがれ！」

その場に根を張ったようになった腕は引き摺って移動することも叶わない。

自分の腕を引き千切る勢いで力を込める。

変形した部分と生身の部分の繋ぎ目の肘のやや上部の皮膚が引つ張られて激痛に冷たい汗が背筋を伝う。

それでも右腕はぴくりとも動かない。

重さのせいかな、洞窟の岩肌にめり込む腕はどう頑張っても動かせる気配はない。

化け物は大きな口を開けて、世良羅へと飛びかかった。

「いやあああつあつ！」

甲高い悲鳴が洞窟に反響する様に響き渡り、俺は顔を背けた。

突如、上空に舞い上がる様な感覚。

エレベーターで上昇している時は、丁度こんな風に不快感が内臓を揺らし、耳を詰まらせる。

体育館から洞窟へ移動した時とよく似た感触に恐る恐る^{まぶた}瞼を開いた。

^{うつむ}俯いていた視線の先に映るのは見覚えのあるテープで点線状のラインが引かれた艶やか木目状の床。

先程の暗がりと比べ、遥かに眩しくなった視界に瞳の奥がじんと痛む。

周りを見渡すと洞窟に飛ばされる以前は綺麗に整列し姿勢を正していた生徒達が体育館中に拡がる様にばらけ、一様に息を荒げて臨戦態勢の構えをとっていたり、恐怖に腰を抜かす様に尻餅をついていたりしている。

^か斯く言う俺も体育館に戻れた事を認識しているにも関わらず、いまだ膝は恐怖に震え、背中には冷たい汗をびっしょりと掻いていて、肌にくっつくシャツが気持ちが悪い。

（戻って来たのか？ もう安全なのか？）

急激にやってきた安心感に俺はその場へとへたり込み、大きく息を吐いた。

「——兄さん！ 無事でよかった！」

翔が俺に飛びついて来た。

随分心配していたのか目には涙を浮かべている。

俺は自分の事に必死で翔の心配をする余裕すらなかったのに、同じ状況にいたと思われる翔はしっかりと駄目な兄を心配してくれるから敵わない。

びしょ濡れになった俺のシャツに掴まって鼻を^{すす}吸る翔の頭を^{ふがい}不甲斐無さは一旦横に置いておいて努めて兄らしく、優しい手つきで撫^なでてやった。

元の空間に戻れた今、世良羅は果たして無事なのだろうか？

と途端に心配になり辺りを見渡すと、壁に寄り掛かる世良羅が億劫そつな表情を浮かべて、先程まで化け物に掴まれていた二の腕の辺りを抑えていた。

鋭い爪をした化け物に掴まれて怪我をしたのではないかと案じたが、それは余計な心配だったらしく俺の視線に気付いたのか、勘のいい世良羅は殺気の籠った視線を俺に返してきた。

俺が不自然に引き攣る笑みを向けると世良羅も引き攣った笑みを返してくれた。

（よかった。あまり怒ってはいないみたいだ。）

と思ったのも束の間、癖なのだろうか、先程のごたごたで少し汚れてしまった白いカーディガンの裾を掴んで肩を竦めながらつかつかと俺の方へと気味の悪い笑顔を湛えたまま歩みを進めてきた。

目の前で立ち止った世良羅を見て、（必死で助けようとした気持ちだけは伝わっていたのかな？）

と気が緩んだ瞬間。

頬に激しい痛みを感じ、正面を向いていた筈の首が大きく右に振れた。

体育館中に響き渡る頬を打った平手の音に視線が集中する。

頬も痛いが集まる視線も痛い。

女子に殴られている所を皆に見られるのは恥ずかしい事この上なく、最上の恥辱である。

茫然自失のまま、首さえ正面に戻せないでいた俺は翔の「に、兄さん大丈夫？」の一言に正気を取り戻す。

文句の一つも言ってやろうと勇んで顔を正面に向け、口を開いたが言葉は喉の辺りで止まった。

いつもはやや右寄りで綺麗に分けていた前髪が顔にかぶさる様に乱れ、後ろ髪もぼさぼさになっている。

頬は煤けていて、笑んでいた筈の顔は悲しげなものに変わっていて

金色の大きな瞳にはじんわりと涙が込み上げてきている。いつもは勝気な世良羅もやはり怖かったのだと痛感した。

無事だったとはいえ、化け物の大口がそこまで迫って来たのだから無理はない。

俺が頬を打たれたのだって、当然の報いだ。

世良羅は確かに俺に助けを求める視線を投げたのに、結局俺は何もする事は出来なかった。

「貴方！ いきなり何を——」

事情を知らない翔が底^{かは}おうと前に出たのを俺は左手で裾で引っ張り、押し留めた。

「いいんだ。俺が全面的に悪かったんだから。」

その言葉がさらに怒りを煽^{あお}ってしまった様で世良羅は両手で俺の胸を思いつき突き飛ばし、鼻を鳴らして離れていった。

後ろ姿の世良羅の右手が目を擦る様に伸びたのが見えた。

涙を拭ったのか、煤^{すす}を拭ったのかはわからなかったがそれは俺の胸を締め付けるには十分な素振りで、力いっぱい突かれて胸が苦しくなり咳き込みそうになったが、被害者面をする事になってしまいそんな気がして息を止めて必死に堪^{こら}えた。

「——兄さん、また彼女と何かあったの？」

心配そうに俺の顔を覗き込む翔の髪をくしゃっと握って「何でもねえよ。」と誤魔^{ごまか}化した。

「——にしてもさっきのは一体なんだったんだ？」

心配し続ける弟の気を逸^そらそうとに問うと、口元に手を当てて考える素振りをした後、真剣な面持ちで翔は言った。

「意図は想像がつくけど、この世界はやっぱり僕等の世界と感覚がずれているのかもしれない——ってそれどうしたの？」

派手に変形した俺の右腕に今頃きずいた翔は目を丸くして驚いた。どうやったら元に戻るのかわからない俺は変形してしまった右腕を擦りながら経緯を世良羅との内容は出来る限り端折^{はしよ}って説明した。

「兄さん、この素材つてもしかしてあの森で見た建造物の……。」

「似ているよな。それよりもどうやってこれを元に戻すのかが知りたいがな。ずっとこのままじゃ茶碗も持てないから餓死しちまうよ。」

俺のいつもの自虐^{じぎやく}に翔は笑みを取り戻してくれた。

「外部から手動にて、憑代を起動。術式強制終了——これでよし」と。

翔が変形した腕の手首辺りをいじり、何かの作業が終わった合図をするようにポンと叩くと俺の右腕は見る見るうちに縮小していき元通りになった。

変形時に破れてしまったワイシャツの裾はそのままだが、右腕だけ人間を捨てるよりは遥かにマシだと自分に言い聞かせて諦めをつける。

「——にしてもお前は何でMRDの使い方を知っているんだよ？」

「この世界で、特にこの学園で生活していくにはMRDは必需品みたいだしね。僕には兄さんが無関心すぎるような気がするけどな……。」

悪気なく口にした翔の一言に胸がちくりと痛んだ。

無関心なわけではなかったが、^あ敢えて知ろうとはしなかった。

仕方なく一時的にこの世界にいるだけだ。

こつちに来てからずっとそんな事を考えていたから、向こうの世界ではあり得ない魔法の事をなるべく知らずに過ごせばそれが最善だと思っていた。

俺はいつも間違いを犯してからそれが間違いだった事に気がつく。そして取り返しのつかない後悔を繰り返してばかりいる。

もう少し魔法の使い方を翔の様に勉強していれば、世良羅を助ける事ができたかもしれない。

例えば救う事はできなくても援護するくらいはできたはずだ。

今回は事なきを得たが、一步間違えば俺の不甲斐^{ふがいな}無さのせいで命を

落としていたかもしれない。

最上級師達がそこまでするわけはなかったとしても、周囲の生徒達を見ると結構な傷を負っている者もいる事から、大怪我していた可能性は大いにあり得る。

「——ちくしようが。」

翔には聞こえないよう、自責の言葉を呟いた。

「オラア！ ゴミ虫共がいつまで騒いでんだ！ さつさと並べ！

または死ね！」

朝のHRまでは癪に障っていた暴言も化け物の巢から帰って来た今では不思議と心地よいくらいだ。

周囲の者と生還の喜びを分かち合っていた生徒達も静琉の怒声に列を作り始める。

制服が破れてボロボロの者や、多少なりとも怪我をしている者も大勢いたが最上級師の教師達は容赦なく並ぶように急き立てる。

やがて、元の通りに整列が完了するとステージの上で待ちかねていたかの様に志智郎が口を開いた。

「ごほごほ。皆さんお疲れ様です。ごほっ……楽しいひと時を過ごせましたでしょうか？」

何を言っているのかと苛立ちが募る。

こんな時は穏やかで丁寧に語られるよりも静琉のように罵詈雑言を浴びせられた方が幾分マシだ。

「——楽しくはなかったみたいですね。けれどそれでいいのです。魔法錬成なんてものは怖くて恐ろしいものなのですよ。げほっ。」

言葉の途中でフレームの厚い黒縁眼鏡を人差し指で上げた後にレンズから覗いた志智郎の眼光は洞窟に飛ばされる前に「死んでください。」と言葉を発した時の瞳と同じものだった。

生唾を飲み込む音が体育館に響き渡った気がした。

緊張に思わず生唾を飲み込んでしまったのは俺だけではないはずだ。そのくらいに志智郎の眼光は獵奇的な印象を抱かせた。

「この学園に入学する際、大体の人はこれから待つ楽しい学園生活を想像し、半ば浮ついた気持ちでこの体育館に立ちます。けれど魔法錬成技術の習得及び上達の道は極めて厳しく、浮ついた気持ちでは死に繋がる恐れすらあります。なので先程の洞窟探検はそんな諸君らの気を引き締める為の通過儀礼的なものだと思って頂ければ幸いです。ごほつごほ。後は自分達の無力さを存分に思い知って頂けたかと思えます。素人の中では中途半端に錬成に長けた方が入学してくる事の多いこの学園では、そんな勘違いを正す事が安全面でも諸君らの成長の妨げを除く意味でも大変重要な意味を持つのです。」志智郎の言いたい事は理解できる。

魔法の危険さと錬成技術の未熟さを示したかったと言う事なのだろう。

確かに昨日の世良羅の一件からしてもこの世界の人間は危険な魔法を容易に振り回す節は見て取れたし、身を持って教えるというやり方自体はあながち間違いいではないのかもしれない。

けれど、さっきのは完全にやり過ぎだ。

生徒達のほとんどは軽傷ではあるにしろ怪我を負っている。

世良羅に至ってはもう少し体育館に戻るのが遅れていれば大怪我をしていたかもしれない。

しかし、そんな事を力のない俺が声を大にして志智郎に訴えた所で説得力などありはしない。

志智郎ははっきりと言う事はしなかったが、「危険が恐ろしいければ去れ」と暗に言っているようにも聞こえた。

（こんな所にいる意味はあるのか？ こんな事をしている間に元の世界に戻る方法を探した方がいいじゃないのか？）

無数の逃げ口上が脳裏に浮かんで消えたが本当はわかっていた。

この世界の人間は異世界に移動する魔法は使えないと祖母は言ったが、現に俺や翔はこの異世界へと飛ばされてきた。

そんな漂流者である俺達ならば、魔法練成技術を磨けばもしかしたら元の世界へと転移する事も可能かもしれないと祖母は思ったのだろつ。

今はこの世界に來た時にいつの間にも俺の腕に装着されていた腕のMRDだけが手がかりなのだから魔法練成を身に着ける事が唯一の道である俺には選択の余地なんて最初からなかった。

「この世界の人間じゃないから――」と何かをする前にやらなくていい言い訳を探しているから俺は道を間違えてしまつた。

（目の前で人が死んだり、傷ついたりするのを何も出来ずに見てるのはもう御免だ。）

強く、強く手首のMRDを握り締めた。

自分の中にある弱さを握りつぶす様に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6941y/>

ゴーレムマイスター

2011年12月2日21時48分発行